

〔報告②〕

異本・異文と作品論

北海道大学 小林理正

「異本」・「異文」なる術語は研究者の間でも理解が揺れている。こうした状況にあつては、それらと作品論とを結ぶ論考が他者との間でコンセンサスを得るのは難しい。本報告では、異本・異文と作品論をめぐる考え方や問題意識のすり合わせを行いつつ、今日的な課題である本文研究と作品論の再接続、その方途について考える。

〔報告③〕

異文が「生まれる／消える」ということ

——『源氏物語』梅枝巻の「きんた」と「きんたう」——

中央大学 中川照将

解釈は本文に基づいて行われるものとしてある。ただ、『源氏物語』享受史を辿ると、本来は後発的な立場にあるはずの解釈が本文を書き換えるという現象が見られることに気づく。本報告では、大島本をはじめとする『源氏物語』諸伝本間に見える異文や本文校訂跡の問題と、作品論との関連性について考察する。

〔報告④〕

読むことで多重化する〈世界〉

鹿児島国際大学 武藤那賀子

作品を読むことで見える〈世界〉は、一定ではない。それは、①「読む側のものの見方」、②「諸本の種類」、そして③「作品そのものが辿ってきた歴史」によって、〈世界〉が左右されるからである。①「読む側のものの見方」は言わずもがなである。②「諸本の種類」については、たとえば、『源氏物語』は諸本によって話の内容が大きく変わることはないが、『住吉物語』は諸本によって人物の性別が変わってしまう。また、室町時代物語は、作品の冒頭文からして全く違う場合が多々ある。③「作品そのものが辿ってきた歴史」とは、本の装訂等によってそれ自体が文化を担うものとなっていることを指す。本報告では、これらの観点から、作品を読むこととその〈世界〉を読むことの繋がりについて考えていきたい。